

〔論 説〕

## 紀 要 に つ い て

編集委員長(短期大学学長) 塚 俊 明  
編集顧問(同客員教授) 増 田 芳 雄

### は じ め に

本学院紀要は昨年から装いを新たにし、掲載論文の向上、充実を図り、これに伴って表紙の体裁を変えた。すなわち、査読制度を確立し、また英文要旨を付するなど、投稿者も投稿論文の質の向上に努めた。こうしたより良い紀要の刊行を目指す編集者、投稿者の努力は今年度更に進み、本巻には短期大学のみならず、広く藍野病院、専門学校教員の皆さんから優れた論文を投稿していただいた。学院関係の皆さんのご協力のお陰で本学院紀要はさらに充実したことに感謝する次第である。

この時期にあたり、看護系の大学、短期大学紀要に関し興味ある批判的論説が発表された(川口貞親, 1999)。これを機会に”紀要”という大学、短期大学の発行する論文発表のための学術雑誌について、本学院紀要編集に責任をもつ私たちの見解を明らかにしておきたい。

研究者にとって研究成果を論文の形で発表することは「研究の完成」として必要であり、研究者がもっとも努力を傾ける仕事は論文を書くことである。「研究者の最初にして最後の報酬は、自分たちの論文が権威ある学術雑誌に掲載されることだ」(村上陽一郎, 1994)という言葉は論文に生命を賭ける研究者の本質をよく言い表している。

ここで「権威ある学術雑誌」とは何を指すか。その定義は一概にはいえないが、一般には以下の条件を満たした学術雑誌であろう：(1) 複数の審査員により公平な審査を行ったうえ投稿論文の採否を決める、(2) このさい、審査を行う人物は当該機関内外の、研究者として実績と一定の評価を得ている者である、(3) 国

際的な性格をもち、各国の専門家が読み、投稿する雑誌である、(4) インパクト・ファクター (impact factor, 他者評価)あるいは引用頻度 (citation index) が大きいこと、など。この両者は本質的に同様のもので、雑誌の客観的評価の一つの指標である。インパクト・ファクター (IF) の具体的な計算法を示すと、以下のとおりである：

ある年の IF =

$$\frac{\text{その年の全論文中で引用された前年+前前年の論文数}}{\text{前年+前前年に印刷・掲載された論文数}}$$

ある理学関係の学会雑誌の例を示すと表1のようになる(西村幹夫, 1999)。科学一般を扱うイギリスのネイチャーとアメリカのサイエンスは例外としても、学術雑誌で IF 2 を越える学術雑誌は極めて評価が高いといえる。

表1 ある学術雑誌のインパクト・ファクター計算の一例(西村幹夫, 1999)

他の学術雑誌 (1997) に引用された、この雑誌掲載の論文数	1995 : 433 編 1996 : 257 編 合計 690 編
この雑誌にこの2年間に掲載された全論文数	385 編
したがって、この学術雑誌の 1997 年の IF は： $690 / 385 = 1.792$ となる。	

では、個々の大学・短期大学等の発行する「紀要」は権威ある学術雑誌の範疇に入るであろうか。その答えは「否」である。では、紀要に研究論文を発表することにはどのような意味があるのだろうか。

表2 主な科学, 精神科学, 生物科学関係の学術雑誌のIF例 (1995)

雑誌名	インパクト・ファクター (1995)
Nature	27.07
Science	21.91
Archives of General Psychiatry	11.16
Journal of Molecular Biology	5.35
Brain	4.87
Plant Physiology	3.83
Schizophrenia Research	2.53
Journal of Neurology, Neurosurgery & Psychiatry	2.50

本稿では筆者らの専門分野における経験を述べることによって「紀要」の意義について考察したい。

## 1. 紀要の歴史

学問の先進国であるドイツには19世紀以来、相当数のいわゆる権威ある学術雑誌があった。しかし、これらの雑誌に論文を投稿すると、厳しい審査を受けねばならず、その過程において投稿者は編集委員会と時には不愉快なやりとりをしなければならぬ。一般に、審査の公平さを保つため、審査員(査読者)は匿名で審査するので、投稿者はその論文に関する反論、釈明等は編集委員会を通じて行う。この過程を経て、投稿論文は幸運にも採択されることもあるが、不幸にして不採択の憂き目を見ることもしばしばある。このような不採択という審査結果を受けるといことは若い研究者だけでなく、当時のドイツにおける著名な教授たちにもしばしば起こった。それほど論文審査とは公平かつ厳しいものであるべきであり、だからこそ権威ある雑誌に論文を掲載して貰うことは「研究者にとって最初にして最後の報酬」ともいえるので、その結果研究者の業績になるのである。

19世紀半ば、ドイツ、ヴュルツブルク大学のある著名な教授は、論文投稿で編集者とトラブルを起こすことを避けるため、彼の教室から「紀要」を発行することにした。そして、その教室で学んだ学生の学位論文はすべてこの紀要に掲載することにした。すなわち、すべての研究はこの教授の指導下に行われたのはもちろんであるが、さらに研究を行った学生の論文を自ら検討、審査し、可とするものを紀要に掲載し、学位を出す、ということにしたわけである。この紀要は筆者らの専門分野における紀要の始まりと思われる。

我が国における「紀要」の始まりは理学関係では、東京帝国大学紀要が発刊された1893年(明治28年)であり、大学が整備された時のことであった。すなわち、明治10年に設立された東京大学は明治19年帝国

大学となり、法、医、工、文、理、の5つの分科大学および大学院が設置された。明治21年には初めての博士号が授与され、26年には講座制が創設、教授会が発足した(東京大学百年史, 1987)。こうして各学科と講座が独立性を確立し、その一つの現れとして「紀要」が発刊されるようになったのであろう。そして、以後は学位論文は紀要に発表されることになった。東京帝国大学より20年遅れて設立された京都帝国大学、あるいは東北帝国大学も同様の道を歩んだ。

このように、とくに日本の場合、大学設立が欧米諸国より遅かったので、大学教員が欧米の国際的学術雑誌に論文を投稿する前段階としてそれぞれ独自の研究発表機関として紀要を発行し、これに学位論文を掲載したと思われる。しかし当時でも、海外留学生は留学中に行った研究をドイツの学術雑誌に投稿、掲載されることは珍しくはなかった。事実、それらの論文は優れた内容で、当然ながら立派な独、英語で書かれている。ドイツの学術雑誌にならい、同様の雑誌を日本に創り、ドイツ語で書かれた論文のみを受理した東京帝国大学教授もいた。この雑誌も紀要の一種であろう。

東京帝国大学が設置されて以降、各種学会が発立され、それぞれが「学会誌」を発行し始めた。しかし、多くの場合掲載論文は和文で書かれており、いわば国内向けの雑誌であった。その点、旧帝国大学の紀要の場合、学位論文掲載という意味からか掲載論文はほとんど独、英文であったので、学会誌より国際性が高かったと言えるかも知れない。

## 2. 新制大学の紀要

1945年敗戦後、アメリカ教育使節団の勧告により、日本の学制は改革され、1949年以降多くの新制大学が作られた。そして戦後新設の新制大学では、各学部学科ごとに紀要を発行することになった。従来我が国にはわずか9帝国大学、いくつかの官立単科大学、私立大学のみであったのが、一挙に「大学」という名の

高等教育機関が増設され、それぞれが紀要を発行したので、その数は膨大なものになった。当時、当然ながら大学増設に伴い教官数も増加し、その多くの者は研究実績も乏しく、また研究論文発表の経験もほとんどなかった。反面、アメリカ式自由競争の原理が移入され、教官の業績が人事に関して重要な要素となった。この論文発表という「業績」蓄積の手段として紀要は利用されるに至ったわけである。

筆者らの経験する限り、日本の国公立の高等教育機関では紀要を発行していた。いずれも編集委員会を設置し、紀要に投稿された論文の編集に当たることになっていたが、「審査制」は採用していなかった。この新制大学発足間もない時期、旧制の習慣が多少持ち込まれたのか、教室員はまず論文を紀要に投稿することが期待されており、当時教官は論文を紀要に投稿するのが一般であった。

しかし、やがて多くの者が次第に海外の国際的学術雑誌に論文を投稿するようになり、各大学では紀要の意義に関する疑問が現れ始めた。そして、大学紛争前には「紀要無用論」が現れ、その後多くの大学で紀要は廃止された。筆者らの知る諸大学における多くの紀要でも、審査は全く行われず、いわば無批判のまま程度の低い、学術論文とはいえない文集が発行されていた。ことに2年制私立短期大学の紀要は内容が貧困で、とくに文系の論文には論文とも言い難いものすら散見した。明らかに査読制のないことによる論文濫作の結果である。このような紀要を発行して他の関係機関に送付すると、この大学あるいは短期大学の評価は完全に低下してしまう。

近年、文部省も論文発表機関に注意を向け、研究者個人の業績評価を掲載雑誌によって行うことになった。この際、国際的な評価の定着した学術雑誌に掲載された論文の著者の業績評価がもっとも高得点であることはもちろんである。次いで国内発行の国際誌、学会誌と続き、紀要に掲載の論文の評価が最低になる。その理由はサーキュレーションが悪いこと、そして何にも増して紀要の場合「論文審査制」が事実上ないからである。

### 3. 紀要の利点

では紀要は本当に全く無用の発行物であろうか。必ずしもそうばかりとは言えない。紀要の評価はその質にかかっている。研究の初心者が自分の研究を国際舞台に出す前、その研究をまとめるための勉強の場、と

いう意味は少なくともあるだろう。研究者が評価に耐える論文を書くことは容易なことではなく、長年の修練を必要とする。大学院ではこのような研究と、研究を纏める論文書きの訓練を受けるが、大学院に学ぶ機会を持たなかった者は自らに訓練を課さなくてはならない。このような多くの高等教育機関の教員にとって紀要は貴重な研究発表雑誌であり、研究訓練機構ともなる。

ただし、このような紀要の機能を十分に生かすには必要条件が一つある。それは公正な「審査制」で、編集委員会内部のみならず、外部の研究者に審査に加わってもらうことも必要であろう。学術雑誌一般の評価がそうであるように、掲載論文がいかに厳密に、公正に審査されたものであるかによってその評価が定まる。その一つのインディケータがインパクト・ファクターである。紀要の場合、これらの評価対象にはならないが、優れた論文は必ず他者の論文に引用される。また、査読制度が確立しておれば、投稿者は査読者によって一種の指導を受けることにもなり、紀要投稿は良い訓練の機会にもなる。

## む す び

以上、紀要の存在意義について論じたが、要は「審査制」を確立することが紀要の評価を高め、また経験の少ない大学研究者に研究発表における一種の教育と「論文書き」の訓練を与える場となる。そして、紀要の評価は掲載論文の質によって決まり、その結果、掲載論文の評価も向上することになる。藍野学院、藍野病院においても教職員の皆さんが紀要の意義を理解し、優れた論文を投稿されることを願っている。

### 引用文献

- 川口貞親 (1999) 看護大学紀要は看護学発展に貢献できるのか? 看護教育 40: 60 - 63.  
 村上陽一郎 (1994) 科学者とは何か 新潮選書 新潮社  
 西村幹夫 (1999) インパクトファクター雑感 日本植物生理学会通信 76: 18 - 19.  
 東京大学理学部 (1987) 東京大学百年史 部局史 2